

放送日： 平成 20 年 3 月 17 日

タイトル： 血尿について

担当者： 医師 瀧本 啓太

血尿は腎、尿管、膀胱、前立腺、尿道のどこかから出血していることを意味し、その程度には健診で指摘される尿潜血から肉眼的血尿までさまざまなものがあります。まず最初に強調しておきたいことはたとえ尿潜血 1 + でも異常であり、1 + だから大したことはないと思えるのは非常に危険であるということです。たとえ尿潜血 1 + でも癌が見つかることがあります。

ここで血尿の原因となる病気についてお話します。血尿の原因として腎臓では腎癌、腎盂癌、腎炎、腎盂腎炎、腎結石などがあります。尿管では尿管癌、尿管結石などがあります。膀胱では膀胱癌、膀胱結石、膀胱炎などがあります。前立腺では前立腺癌、前立腺肥大症などがあります。さらに尿道に原因が発見される場合もあります。原因を調べるための検査としては、尿を用いた検査として検尿、尿細胞診検査、尿培養検査があります。画像検査としては超音波検査やレントゲン検査があります。さらに膀胱を内視鏡で観察する膀胱鏡検査や採血も組み合わせて診断を確定していきます。

さて、ここからは血尿の原因として特に注意を要する病気として、膀胱癌についてお話しします。特に注意を要するといえますのは、血尿が出たが一回だけで痛くも痒くもないというのが最初の症状として認められることが多いからです。一回だけで一旦治まってしまうのでついつい受診するのが遅れてしまいがちです。また、痛みや痒みといった不快な症状も伴わないためにこれも受診するのが遅れてしまう原因になります。もちろん初期の段階でも一回だけではなく頻りに血尿が出現する場合がありますし、頻尿、排尿時痛、残尿感といった症状を伴う場合もあります。その他に目で見て血尿が出たのではなくて健診で血尿が引っ掛かった場合もたとえば 1 + だからたいしたことはないと思いつつ受診するのが遅れてしまいがちですが、精密検査を早めに受けることをお勧めします。

膀胱癌についてももう少し詳しくお話します。膀胱癌の危険因子はなんといってもタバコです。タバコを吸う人に血尿が認められたら特に要注意です。検尿、尿細胞診検査、レントゲン検査、膀胱鏡検査を用いて診断します。治療は経尿道的膀胱腫瘍切除術という内視鏡を用いた手術のみでお腹を切らずに治療出来る場合が多いですが開腹して膀胱全摘出術を必要とする場合もあります。その他に膀胱内に抗がん剤などを注入する治療法や、抗がん剤を点滴する全身化学療法、放射線療法も用いる場合があります。早期発見により膀胱全摘出術を免れることができます。一回だけでも、また、痛みや痒みを伴わなくても、血尿が出るということは癌が隠れている可能性もあるという認識をもち、泌尿器科を早めに受診することをお勧めします。